

【解説】 神と空と島田宗教学

橋爪 大三郎

「神」(キリスト教をはじめとする一神教の文明)と「空」(仏教を下敷きにして成立した日本教の伝統)。この二つの交錯するところに、現代の日本社会は成り立っている。その不安定で、緊張をはらんだ関係を、本書は説得的に描き出している。

キリスト教に代表される一神教を、ほとんど受けつかなかった唯一の先進国が、日本である。この奇妙な事実を、島田氏は本書で何回か強調しているが、重要な指摘だと思う。日本ではふつうに教育を受けると、知らないうちに、宗教に対する侮蔑感、偏見が植えつけられて、宗教を毛嫌いするようになってしまう。これがどんなに奇妙なことか、われわれはもっとよく注意すべきだ。それはまず、明治以来(いや、江戸以来)の政府の政策の結果である。さらに、もっと古くからの伝統の影響もあるだろう。とにかく、いわゆる宗教を寄せつけないという点で、日本は「宗教的」なのかもしれない。

こうした日本社会の宗教的特質を、西欧の宗教学では、うまく捉えることができない。西欧の社

会科学は、キリスト教の存在を空気のように当たり前とみなして、そこからはみ出るものを的確に表現する言葉を持っていない——。ヤマギシ会という、日本的宗教(?)の現実のなを泳ぎ渡り、ふたたび宗教学を選んだ島田氏は、このように考えたろうと思う。そうすると、二つの課題がみえてくる。第一に、キリスト教などの一神教と、日本における宗教のあり方との、共通項がもしあるとすれば、それはなにか? 第二に、日本に独特な宗教のあり方とは、何なのか?

この課題に答えるために、本書は「神」と「空」という対比を提示している。「空」は、仏教の概念を借りているが、本来の仏教とは関係なく、日本での般若心経の読まれ方に典型的に表れているような、日本の宗教的特質なり、組織原理なりといった意味である。そのうえで、本書は絶妙な具体例を捉えることによって、両者の対照と肉付けをはかる。それはたとえば、日本におけるミッシェン・スクールの役割(「神」↓「空」へのベクトル)である。そしてまた、ヤマギシ会や新しき村の考察(「空」↓「神」へのベクトル)である。これらの事例を掘り下げることにより、「神」と「空」のねじれた反転の構図が透けてみえてくる。

*

このように、両者の対比は明らかとなった。それでは、「神」と「空」の共通項(宗教的なものの共通の基盤)はなにか?

島田氏の見解を本書からつかみとるのは、読者にまかせるとしよう。私自身はそれを、「『ゴドーを待ちながら』の原理」なるものによって、説明できるのではないかと考えている。

ノーベル賞作家サミュエル・ベケットの有名な戯曲に、『ゴドーを待ちながら』というのがある。

幕があがると、二人の登場人物、ゴドーとディディーが、やがてやってくるというゴドーを、あてもなく待つっている。手持ちぶさたをまぎらわせるために、とりとめもないお喋りをしながら、彼らはひたすら待つ。観客もだんだん彼らに同化して、舞台の袖にゴドーが控えている、いまにも舞台に登場してくるのではないかと思うようになる。それでもゴドーは現れず、第一幕は終わってしまう。第二幕も、同じことの繰り返し、いつこうに現れないまま幕が下りる。そんな舞台である。

これは言うまでもなく、キリスト教の戯画(パロディー)である。十字架上に死んだイエス・キリストが、三日ののちに復活し、天に昇って行った。彼はやがて、この世に最後の審判を下し人類を救済するために、再臨することになっている。ではそれは、いつか。パウロは「間もなく」だ、とのべた。ところがなぜか、なかなか現れない。そうこうするうち、かれこれ二千年も過ぎてしまった。なぜキリストは、ちっとも再臨しないのか。これがキリスト教の最大の謎であり、泣きどころになっている。

ゴドーとディディーは、ゴドーを待つ。ゴドーが存在する(やがてやってくる)から待つのだと、彼らは思っている。しかし、話はあべこべで、じつは彼らが待つからこそ、ゴドーが存在する(やがてやってくる)のではないか。そうしたことを、この舞台を観ている観客は考えさせられるのだ。

あることを前提にしてふるまう(たとえば、ゴドーを待つ)と、その前提が「実在」し始める。そのふるまいが続いている限り、その前提を疑うことができなくなる。これを「ゴドーを待ちながら」の原理」ということにしよう。キリスト教を信じる人びとが、神の存在を疑わないのも、仏教を信じる人びとが、覚りの存在を疑わないのも、この原理によるのではないか。そして表面上は異なっ

てみえるさまざまな宗教も、じつはみなこうしたメカニズムを具えているのではないか。この原理こそが、「神」と「空」の共通項である、と考えてみることができる。

*

いっぽう、日本の独特な点はなにか。

日本の場合、人びとのふるまいに隠された前提があっても、それが（二神教の）「神」とか「仏」とかといった明確な像を結びにくい。なぜかと言うと、人びとのふるまいの前提となつて、人びとが重視するのは、人びとが属する集団それ自身であるからだ。集団はしばしば、人びとを引き込む宗教としての吸引力をもっている。しかし集団は、輪郭があいまいでいつもメンバーが入れ替わっており、分裂したり合体したりして不安定なものである。島田氏が本書で紹介している、新しき村やヤマギシ会といった集団のあり方も、こうした特徴をよくあらわしている。

あらゆる集団（やその集まりである社会）の外に立つ、絶対の神。あらゆる認識や行為の根底にある、絶対の法則。そういったものを前提するからこそ、人間も集団も相対化され、絶対の価値に服するものとされる。これが、（二神教の）「神」や「仏」のロジックである。それに対して、自分の属する集団を神聖視しようとする（それを越えるものを認めない）と、絶対的なものと相対的なものが入りまじり、宗教的な動機と現世的な関心が入りまじった、日本のような社会空間ができあがる。そこでは「宗教」は、人びとのふるまいの前提を破壊するものとして、排除されることになる。

ごくごく簡単ではあるが、日本独特の宗教のありようを、このようにスケッチすることができる。そして本書が指摘する、宗教にいい加減であると同時に宗教に不寛容な日本人の矛盾した態度や、

日本人の勤勉さや、天皇制の特徴などを、ここから説明することができると思う。

政治学、経済学、社会学など、西欧から直輸入した日本の社会科学が、こうした日本社会の特徴をよく捉えてきたとはいえない。それらはどれも、キリスト教文明圏の常識をなぞったものだからだ。それにひきかえ、日本の宗教学者は、さまざまな新興宗教教団や土着信仰の共同体にもぐり込み（参与観察）、西欧社会科学の枠に収まりきらない日本社会の特徴と向き合つて、格闘してきた。島田氏の仕事もそうした脈々たる伝統を汲んでいる。

*

それでは、島田宗教学の特徴はなにか。

それは、イニシエーション（成人儀礼）であると思う。

島田氏の出発点は、何と言っても、ヤマギシ会体験にある。彼は、プロの宗教学者としての訓練を開始する前に、ヤマギシ会に飛び込んだ。宗教学の知識は、彼を守ってくれなかった。そこでの体験が、彼を宗教学者として一人前にする、イニシエーションとしての役割を果たした。宗教学によって、そこでの体験を解釈したわけではない。彼は、あべこべにそこでの体験によって、宗教学を理解したのである。

島田宗教学の特徴は、青年期にさしかかる若い人びとが宗教に触れ、悩み苦しむありさまを、イニシエーションというより広い枠でとらえ、それを宗教以外のさまざまな現象と並行したものであると考える点にある。イニシエーションは、どの社会にもあり、誰でもが通過しなければならぬ成長の一段階である。宗教はその、ひとつのあらわれにすぎない。その意味で、宗教を特別視した

り、排除したりする日本社会のあり方は、間違っている。マスメディアや映画、芸術、日本文化、さまざまな文化現象に対する島田氏の活発な発言は、イニシエーションとしての宗教を解明した成果を、それ以外の分野に適用していくという方法論に裏づけられている。

ここから、よい新興宗教／わるい新興宗教、という大胆な発想も生まれてくる。

宗教の機能がイニシエーションにあるのだとすれば、それを十分に行なっているのがよい宗教であり、不十分であれば悪い宗教である。ふつうの宗教学者は、ウェーバーの「価値中立」の考え方に従って、研究対象のいっぽうに肩入れしたりしない。しかし島田宗教学は、たとえば、幸福の科学に比べるとオウム真理教のほうがより「よい」、といった価値判断を下す。こうした判断にはそれなりの根拠があるのだが、オウム真理教は島田氏の評価を最大限に利用し、一部のマスコミも島田氏を「オウム寄り」と誤解するという結果をまねいてしまった。

島田氏をオウムの一味として追及した一部マスコミの言説が、無責任なヒステリーにすぎなかったことは明らかだろう。いっぽう、オウム真理教の正体を見極められなかった、という島田氏個人への批判に対しては、では誰がその正体を見極めていたのか、と逆に問うことができる。オウム真理教は、まるで冗談のようなさまざまな趣向の寄せ集めでありながら、異様に本気な秘密の内側をもった、外部に対して閉ざされた集団だった。そうした集団の実態を、公開された材料だけから推測するのはきわめて困難なことだった。

当局の捜査や裁判が進み、教団の内部が明らかになったいまこそ、オウム真理教の解明を進めるべきときである。そんな折しも、オウム事件を中心にした、島田氏の満を持しての新著『宗教の時

代とは何だったのか』（講談社）が近く上梓される運びという。島田氏自身も無傷では済まなかったオウム真理教事件であるが、これを素材にしてこそ、当事者の視点から問題の本質に迫っていく、島田宗教学の本領が発揮されるに違いない。

（はしづめ だいさぶろう・社会学）